

古典学派の二つの貿易理論

井上 次郎

—

古典学派の貿易理論というと、ひとは比較生産費説 (Theory of comparative cost of production; *Theorie der komparativen Produktionskosten*; *Théorie du coût de production comparative*) を想起するであらう。それほど比較生産費説は古典学派と固く結びつけられて伝承されている。だが、この著名な比較生産費説は、古典学派にとって、同学派の開祖アダム・スミス以来の伝統というわけではない。数多くの古典学派の他の諸理論がいずれもその源を始祖アダム・スミスに発しているのに対し、比較生産費説はこの点で甚だ趣を異にしている。

比較生産費説は普通『リカアドオの理論』の名をもって喧伝されている。スミスとリカアドオは同じ学派に属するといふものの、本来類型を異にするところの学者であつて、リカアドオが理論の精緻統一に秀でているのに対して、スミスは想華の多彩絢爛をもって鳴っている。リカアドオは問題を一つ一つきつめて考え抜くことの思想家でその理論は局限的、純理的であるのに対し、スミスにおいては問題の処理がいちじるしく多面的で、従つてその理論は多面的、包括的であることが、両者のこよない対照を示すものとなつてい⁽¹⁾る。

この特色は、貿易理論の考察についても、如実に現われている。リカアドオの貿易理論は、いわゆる比較生産

費説によつて貫かれている。彼の貿易理論がこれを基礎として首尾一貫した結構をもつて展開されていることが、多くの学者によつて比較生産費説の創始者たる榮譽が彼に与えられた理由となつてゐる。⁽²⁾

もちろん、スミスの『諸国民の富』の中においても、比較生産費説の萌芽形態と目されるべき見解が、散見されぬでもない。たとえば、スミスが、同書の第一編、第一章『分業について』と題する箇所で、

「実際のところ、もつとも富裕な諸国民は、農業においても製造業においても、一般にそのすべての隣国民をしのいでいるが、かれらは前者よりも後者の優越性によつていっそう他をひきはなすのがふつうである。かれらの土地は、一般によく耕作され、また比較的多くの労働や費用がそれについていさやされているから、面積やその自然的多産性の割合には比較的多く生産する。しかし、生産のこの優越性が労働や費用の割合以上のものであることはめつたにない。農業においては、富国の労働が必ずしもつねに貧国のそれよりもはるかに生産的であるとはかぎらないし、すくなくとも製造業でふつうであるほど、はるかに生産的ではけつてない。それゆゑ、富国の穀物は、その品質が同一程度であれば、必ずしもつねに貧国のそれよりも安価に市場へでまわるとはかぎらないのである。フランスという国は、すぐれて富裕で進歩しているにもかかわらず、ポータンドの穀物は、その品質が同一程度であれば、フランスのそれと同じように安価である。たとえフランスは、その富裕や進歩において、おそらくはイングランドに劣るであろうけれども、フランスの穀物は、穀産諸地方ではイングランドの穀物とまったく同品質で、たいていの年にはほつ同一の価格である。とはいへ、イングランドの穀産地は、フランスのそれよりもよく耕作されており、またフランスの穀産地は、ポータンドのそれよりもはるかによく耕作されている、という。しかしながら、貧国は、その耕作では劣つていても、なお穀物の安価や品質においては、ある程度まで富国に匹敵できるが、そのもろもろの製造業においては、このよう競争ができるなどと主張することはけつてできないし、すくなくとも、それらの製造業が富国の地味・氣候および位置に適合しているはあいはさうである」⁽³⁾

といつた、たぐいである。だが、スミスは、この見方をば、これ以上追究してはいない。彼の貿易理論の主たる部分は、それとは異なる観点から展開されている。

(1) 拙著、リカアドオ貿易論の研究、三和書房、参照。

(2) かつて、比較生産費説の創始者は誰かということについて、論争が交わされ、学界を賑わしたことがある。ロバート・トレンズ Robert Torrens (1780—1864) を推すものとデヴィッド・リカアドオ David Ricardo (1772—1823) を挙げるものとに分れ、それぞれ自説を主張して譲らなかつた。後年、ジェイ・ヴァイナー J. Viner が、これ等の論争を回顧して、「その学説の可なり満足な規定を発表した点においては、トレンズは明らかにリカアドオに先んじていた。だが、リカアドオこそは、その学説に、それに相応しい重味を与えた最初の人であるという名誉を担う権利のあることは、疑を容れない。というのは、その学説に適當な位置を占めさせた最初の人は彼であり、経済学者の一般的容認をかちえさせたのも彼であるから」(J. Viner, *Studies in the Theory of International Trade*, 1937, p. 442)と述べてゐることは、肯綮を得た言というべきである。なるほど、時の前後からいふならば、トレンズの方がリカアドオよりやや早かつた。だが、この理論は、リカアドオの経済学者としての名声と相俟つて一世に喧伝され、彼の後継者によつて伝承されたのである。すなわち、リカアドオの経済学者としての重さが一般の容認を得させたのである。而も、況んや、トレンズの見解は、特にその初期のものは、素朴に過ぎ、理論の把握も不たしかで、しばしばその意義と内容とに關して混乱を招いておいてをや。だから、リカアドオを比較生産費説の創始者と稱したからとて、強ちしも牽強附会の譏をば受けないであらう。比較生産費説を『リカアドオ理論』の名を以て呼ぶ所以である。

(3) Adam Smith, *The Wealth of Nations*, The Modern Library Edition, pp. 6—7. 大内兵衛、松川七郎訳、岩波文庫版「諸国民の富」(一、一〇三—一〇四頁)。

もつとも、この文章にすぐ統いて、「フランスの絹織物がイングランドのそれよりも優良で安価であるのは、すくなくとも原料絹糸の輸入に高税が課せられてゐる現状においては、絹織物業がフランスのばあいほどイングランドの氣候に十分適合してゐないためである。しかし、イングランドの金物や粗毛織物は、フランスのそれらとはくらべものにならぬほどすぐれており、同一程度の品質であれば安価でもある」

と述べ、絶対的生産費の立場からの見解が披瀝されてゐるところから視ると、スマスは、どの程度にそれを意識していたかはさだかではない。

二

それでは、スミスは、おもに、どういう観点から、貿易理論を展開しているのか。われわれは、その集中的な表現を、次の章句に看出すことができよう。

「外国貿易の行われるいかなる場所の間においても、それ等の場所は悉く外国貿易から二つの異なる利益を得る。貿易は、それ等の場所の土地と労働の生産物のうちで、その場所では需要のない余剰部分を持ちだし、その代りに、需要の存するなん等かの他の物を持って帰る。貿易は、余剰物をば、その場所の需要の一部分を充たし享楽をば増すことのできる他のなん等かの物と交換させることによって、余剰物に価値を付与する。これによって、内国市場が狭隘でも、技芸もしくは製造業のいかなる特定部門の分業も、最高度に完成されることを、妨げられないことになる。内国の消費を超過するであろうところの、それ等の場所の労働の生産物のいかなる部分に対しても、一層広汎な市場を開放することによって、その地域を力づけてその生産力を改善し、その年々の生産額を極度にまで増加し、それにより、社会の真の収入と富とを増大する。」⁽¹⁾

スミスの見解に拠ると、国際貿易なるものは、

- 一 国内市場の狭隘さを克服し、内国の需要を超過する余剰物に対して、販路を提供するものであり、
- 二 分業を改善し、その国の生産性の一般水準を高める、

ものなのである。H. Myint は、スミスの貿易理論の中に潜んでいるこの二つの観念を弁別し、一方は『余剰物捌け口』説 (the "vent for surplus" theory) と名づける理論となるものであり、他方は『生産力』説 (the

“productivity” theory) と呼びうる理論となるものであるとなしている。

リカドオの見地は、これとは異なる。彼は、国際貿易の成立と利益を、一貫して比較生産費の原理にもとめている。もちろん、国際間の商品の移動には、二つの場合がある。一つはその商品がこれを輸入する国ではまったく生産されえない場合であり、他はその商品がこれを輸入する国においても生産されうる場合である。自国において生産されえない商品に対する需要を充たそうとすれば、これを生産することのできる国から輸入する以外にできない。従って、この種の商品が国際間に取引されることについては、格別論議の必要もあるまい。問題になるのは、第二の種類の商品である。リカドオがもっぱら考察するのも、いうまでなく、この第二の種類の商品を対象とするところの貿易である。

リカドオは、国際貿易は必ずしも生産費の絶対的相違を必要とせず、その相対的相違さえあれば起りうると考え、その名著、『経済学および租税の諸原理』(Principles of Political Economy and Taxation, 1817) の第七章、『外国貿易について』と題する箇所において、かの著名な比較生産費説を展開している。リカドオは、数例を用いて、これを説明する。

彼は、ポルトガルとイギリスとを例に採り、いずれの国も羅紗と葡萄酒を生産することができ、しかもポルトガルが両財貨ともその生産においてイギリスに優る場合に、はたして貿易が行われるかどうかを検討する。かような場合でも、ポルトガルの両財貨の優越度が異なる時は、もしポルトガルが羅紗の生産よりは葡萄酒の醸造において一層勝る場合には、ポルトガルは葡萄酒の生産に特化し、イギリスは羅紗の生産に専ら当り、互にその生産物を交換し合うことになる。なぜかという、かくすることが、自国でこれを生産するよりも、より多量の

財貨を入手しうることになるからである。そして、これが国際貿易である、とリカアドオはいう。

以上のリカアドオの理論を要約すると、次のようになる。

- 一 一国が二商品の生産において、他国に較べて絶対的に優越し、しかもその一商品が他商品よりも生産上より大なる優越性をもつ時は、その国は前者を生産し後者を輸入することが有利である。
- 二 一国が二商品の生産において、他国に較べて絶対的に劣勢で、しかもその一商品が他商品よりも生産上より大なる劣度をもつ時は、その国は前者を輸入し後者を生産することが有利である。

これを要するに、国際貿易を決定するものは、生産費の『比較的相違』(comparative differences)といふことになる。かようにして、リカアドオは、一国が他国に比して商品の生産上絶対的に優越する場合においても、なお且つ他国から商品を輸入し、両国の間に貿易の成立する所以を明らかにしている。そこに、また、彼は、国内商業と国際貿易との相違を認める。だから、

「一国内において諸貨物の相対価値を支配する同じ規則は、二国もしくはそれ以上の国の間に交換される諸貨物の相対価値を支配するものではない」⁽²⁾、
ということになる。

スミスとリカアドオは、同じ学派に属し、同じ伝統に倅さす学者ではあるけれど、こと国際貿易に関しては、両碩学の考え方は、かようにいちじるしく異なっている。貿易の起因や利益について、両学者の論ずるところは、類型を異にしているといっても、必ずしも過言ではあるまい。これに関して、北川教授も、スミスの貿易理論には動態論と静態的均衡分析が混在していることを指摘しつつ、スミスの生産力効果に、従ってまた輸出効果に重

点をおく立場を、リカードオの輸入効果に多く比重をおく立場と対比して、注目すべき研究をなしている。⁽³⁾

Myint もまた、国際貿易のための『特化』(specialisation)の解釈が、生産力説と比較生産費説とは異なっているとなし、次のようにいう。

一 比較生産費説では、特化は、貿易国の一定の資源と技術とのうえに構成される静態的な生産可能曲線に沿って移動することを意味するに過ぎない。これに対して、生産力説は、これをば、市場の範囲を拡張、分業の機会を増して、労働者の熟練と技巧を高め、技術革新を促し、これまで技術的に為し得なかつたことも成し遂げさせ、かようにして、一般に、貿易を行う国をして収益を殖やし経済を發展させる動力となると看るのである。

二 比較生産費説では、特化を資源の再配置として考えるのであるから、それは完全に転換のできる過程なのである。しかしながら、アダム・スミス流の考え方では、特化の過程は、一国の生産構造を輸出需要に適応するように造り直すことを意味するのであるから、容易には転換されえないものなのである。⁽⁴⁾

(1) Adam Smith, *The Wealth of Nations*, *The Modern Library Edition*, Bk. IV, Ch. 1, p. 415.

『余剩物捌け口説』に関しては、『諸国民の富』の第二編・第五章にも同趣旨の記載がある。

「ある特定産業部門の生産物が、その国の需要が必要とする以上になるばあいには、この剰余は海外に送られ、国内で需要されるなにかと交換されなければならない。このような輸出がおこなわれないならば、その国の生産的労働の一部は必ず終息し、その年々の生産物の価値は減少する。大ブリテンの土地および労働は、一般に国内市場が必要とする以上、穀物・毛織物および金物類を生産する。それゆえ、それらの剰余部分は、海外に送られ、国内で需要されるなにかと交換されなければならない。この剰余がその生産に要する労働と経費とをつぐなうにたりる価値を獲得しうるのは、このような輸出を媒介としてだけである。」(邦訳、岩波文庫版、『諸国民の富』(一)、四一三頁)。

- (2) David Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, Gomer's ed., London, 1929, p. 113.
- (3) 北川一雅、経済発展と外国貿易、有斐閣、参照。
- (4) H. Myint, The "Classical Theory" of International Trade and the Underdeveloped Countries, *Economic Journal* June 1958, pp. 318-319.

三

貿易の効果に関する論議はともかくとして、更に進んで、貿易の発生ないし成立に関する両者の見解の相違について、比較検討してみることとしよう。

スマイスは、余剰物ないしは余剰生産力の存在をもって、貿易の起因となす。これに対して、リカアドオは、生産費の比較差が、貿易を成立させると説く。ところで、この余剰物捌け口説と比較生産費説とは、⁽¹⁾「これまた Myint によると、次の二つの点で対蹠的なものである。」

- 一 比較生産費説では、一国の資源は一定しておいて、貿易が行われる前に既に十分に活用されているものと仮定する。だから、貿易の機能は、彼我の相対価格を比較して、その所与の資源を国内向け生産と輸出生産との間により有効に再分配することに在る。技術が一定で且つ完全雇用の状態にあるものとするならば、輸出生産の増加は国内向け生産を減少することによってのみ成就されるわけである。これに対して、余剰物捌け口説は、いままで孤立しこれから將に貿易を開始しようとする国は、なんらかの種類の余剰生産力をもっているものと仮定する。このばあいは、貿易の機能は、その所与の資源の再分配というよりは寧ろ貿易が鎖ざされていたため使用されずに残されている余剰資源の所産にたいして新たな有効需要を提供することに

在る。だから余剰物捌け口説を採れば、輸出生産は、必ずしも国内向け生産を減少しなくても、増加されることがなる。

二 国内消費に必要とするもの以上の余剰生産力なる概念は、その輸出にふり向けうる財貨に対しては、国内の需要が非弾力的であつて、且つ（もしくは）その国の内部において資源を他の用途に転換することがずいぶん困難にして、また特種なものであることを意味する。これに対して、比較生産費説は、生産諸要素は国内においては完全な移動性をもつか、少なくとも甚だ移動し易いものであつて、且つ（もしくは）生産の側においても、はたまた消費の面においても、いちじるしい融通性と弾力性があるものと仮定する。かようにして、輸出生産に必要とされない余剰資源は、余剰生産力として残ることなく、国内向け生産に再び吸収されることとなるであろう。たとえ、これがためには若干の期間を要し、その間該国に損失をもたらすことになるかもしれないけれど。

両説はこのように異なるものであるから、スミスの余剰物ないしは余剰生産力捌け口説とリカアドオの比較生産費説とを、貿易理論として同一の範疇に入れることはとうていできない。尤も、スミスの論ずるところは、素朴に過ぎ、従つて、このままでは色々な反論も予想されるし、また事実、これに対して強い批判も加えられたのであるから、一段の理論的整備を必要とするのはいうまでもあるまい。曾て、ヂェイ・エス・ミルが、

「アダム・スミスの外国貿易利益説は、貿易は一国の余剰生産物に捌け口を与え、その国の資本の一部分をして利潤を加へて償還することを得させる、というに在った。かようないまわしは、貿易現象の明白な概念とは相容れない觀念を暗示するものである。余剰生産物という表現は、一国がその輸出するところの穀物なり織物なりを生産するなん等かの必要に迫られており、従つて自国で消費しない部分は、もし他のいずれかの国が必要し、消費しないならば、全く無駄に生産されることにな

るか、またはその部分が最初から生産されないとすれば、その部分の生産に充当されるべきであった資本部分は遊休するに任され、従つてその国の生産高はそれだけ減少することになるかのいずれかであろう、ということの意味するものの方である。かように推量することは、いづれも全く間違つてゐるであらう。一國が自國の需要を超えて輸出品を生産するのは、その國独自の必要によるものではなくて、自國に他の財貨を供給する最も低廉な方法だからである。もしも、この余剰物の輸出が阻害されるならば、その國はこれが生産を止め、対価を与え得ざるがゆえにもはやなに物をも輸入しなくなるであらう。併しながら、輸出を目的として生産することに使用されてあつたところの労働と資本とは、前には外國から購入した自國の所望する物品を今度は国内で生産することに使用されるようになるであらう。もしまた、その物品のあるものが、とうてい国内では生産され得ないならば、その代用品を生産することに使用されるようになるであらう」⁽²⁾

と批判し、かような見解を『重商主義説の遺物』(a surviving relic of the Mercantile Theory)と難詰したことは人口に膾炙している。

また、國際貿易から隔離されている國がどうして余剰生産力をもちうるのか、ということも問題となるであらう。

これ等の問題について、Mint は次のように説明する。

自然資源、生産技術、嗜好及び人口の行き当りばったり式の結合がなされると、かような孤立國も生産力と消費力との間の不均衡ないしは不釣合に悩まざるを得ぬことになる。この不釣合は、高度に発達した價格機構や経済組織をもつところでは調整され得るとしても、これまで外部の世界と接觸のなかつた眞の孤立國では、それ自体なかなかもつて調整され得ないことであらう。そうだとすると、孤立國の資源、技術、嗜好及び人口から生ずる当初のこの不均衡は、余剰生産力の形態で現われざるを得ぬではなからうか。

なおこのアダム・スミスの余剰生産力という概念は、ただ単に余剰土地だけの問題ではなく、余剰労働と結び

ついた余剰土地の問題であつて、しかもその場合この余剰労働はスミスの『不生産的』労働の概念につながるものであるが、この不生産的労働と人口過剰国における土地の甚だしい不足によって惹きおこされる近代的概念である『擬装失業』(disguised unemployment)とを同一視すべきでない。スミスのいう不生産的労働は、その国の内部の経済組織が充分に開発されていない時は、人口の稀薄な国においてさえも生じ得るものである。

かようにして、Myintは、一九世紀における東南アジア、ラテン・アメリカ、アフリカの低開発国の国際貿易に關しては、比較生産費説よりも余剰物捌け口説の方が、次のような理由から、より有効なアプローチを提供するものと考ええる。

一九世紀におけるこれ等の低開発国の輸出生産は、その輸出がひとたび順調に軌道に乗るや、典型的な成長曲線に沿つて急速に發展し、先ず最初は急激に増大し、後次第にその騰勢が鈍つてきたことが、歴史的な事實である。多くの低開発国の輸出生産に見ることのできるこの特徴的な高い發展率は、資源や技術が既に与えられ、完全に利用されているという仮定の上に構築されている比較生産費説によつては實際上説明され得ない。この急速な發展は、これ等の国々が未使用の自然資源と未就業労働から成る多量の余剰生産力をかかえて出発したと仮定することなしには満足には説明され得ない。だから、これ等の諸国にとつては、貿易が開始されたからといって格別資源を国内向け生産から撤回する必要がなく、まだ利用されていない資源、半ば怠惰な労働を動員することによつて、輸出生産が遂行されたのであつた。貿易の開始に伴ない、輸出品がその価値においてもはまたた数量においても遽に増加したのも、また輸出貿易がある程度まで發展するや今度は増勢が鈍り出してきたことも、その主な原因は茲に求められなければならない。⁽³⁾

貿易国の資源の質的差異によって貿易の成立を規定する比較生産費説は、明白な地理上の相違を強調して、略勢のゆえに米の輸出国となっているということは充分に正しいことであるが、同時にまた、それと気候や地勢が略等しい隣国南インド (South India) が米の純輸入国となっているのにビルマがなぜ米の主要輸出国となっているかということが、一層興味のある問題である。この問題を説明するためには、輸出力の主たる決定因として人口密度に注意を向ける余剰物捌け口説の方が勝つてといるいわなければならぬ。

低開発国はまた、事実、広い範囲の変化に対応して、生産方法、生産要素の組合せを変えることのできる発達した弾力性のある経済組織や調整機構をもっているわけではなく、人々は、貧弱な技術と資本とをもって、可変的技術係数ではなく固定的技術係数に近い条件の下に稼働している。しかもその上、それ等の国々の国内向け生産は主として基礎的食料品から成り、また輸出生産は主として工業原料品から成るから、いずれもその需要が非弾力的であつて、従つて、生産の転換も、また生産高の加減による調整も、甚だ困難な事情に在る。だから、この点からも、余剰物捌け口説の方が低開発国の実情にはよく適合するということになる。

(1) H. Myint, *op. cit.*, pp. 321-322.

(2) J.S. Mill, *Principles of Political Economy*, Ashley's ed., pp. 579-580.

(3) この問題については Myint は、次のように説明する。

十九世紀、低開発国の貿易が急速に発展し、輸出品の価値も数量も俱に顕著な増加を見たことは事実である。だが、この増加も、分業や産業の特化が技術の革新を促がし、労働者の熟練や一人一時間当りの生産性が累積的に高まってなされたものでなかつたことも、同様に本当である。

鉱産物や茶・ゴム・砂糖・綿・煙草等を輸出する地区について観ると、なるほど労働者一人当りの生産高は増加したけ

れど、それは、一つには、自給経済 (subsistence economy) から鉱山や栽植農園に労働者を動員したことによるものであり、もう一つは、自給経済の半ば怠惰な労働に比べると作業時間等が長くなったことによるものであった。労働を自給経済から鉱山や栽植農園に転換したことが、生産力の可なり大きな増加をもたらしたことは疑を容れないが、その増加も、多くの場合、一度限りの性質をもつものであった。というのは、自給経済から放出される労働は、未熟で技術的にも後れているのに加え、色々と違った仕事を次から次へと行なわなければならぬ關係上、仕事の量も格別生産力を高めることになり得なかつたからである。しかもなお、これ等の地域の低廉な労働の慣習も生産力の向上を阻む作用をなしたことを忘れてはならない。労働が不足すると、機械を設備したり生産方法を改善したりする代りに、低廉な労働の追加供給を他に捜し求め、これがまた生産力の増大を阻止する作用をなしていたからである。

だから、貿易の開始により、これ等の地域の輸出が急速に伸びたのは、一番大きな原因として、余剰生産力の存在がこれを可能にしたものと観なければならぬ。同様にまた、これ等の地域が、かような状態にとどまる限りにおいて、人口が増加すると、その重圧により、資源を輸出のための生産から自活のための生産に振り向けざるを得ぬことになって、輸出が減退する傾向を生ずることもこれまた見易い道理である。

四

古典学派の開祖アダム・スミスの貿易理論と同学派中興の祖といふべきデヴィッド・リカードオのそれとでは、大いに異なるものがある。今日、古典学派の貿易理論というと、一般にリカードオの比較生産費説を指すものとされ、スミスの理論は忘れられた形になっている。

両者の貿易理論を比較検討している Myint の研究は、はなはだ示唆に富むものである。

彼によると、低開発国、なかんづく一九世紀の低開発国の貿易の起因を明らかにする理論としては、スミスの所論は比較生産費説に勝るものである。もっとも、この見解に対して、その余剰物と目されるものの生産は、実

はたまたまその国が『比較的優越』(comparative advantage)を有するがゆえに、これを生産し、輸出することに
なるのではなからうか、という反論がなされるかも知れない。だが、これでは批判とはならない。というのは、
問題は、いずれの観点から歴史的現実にも迫る方がより有効であるかという、いわゆる接近方法に関するものだけ
らである。

一九世紀において、低開発国の輸出が、他に較べて急激な伸展を示した。だが、それにも拘らず、その間、労
働の生産性——労働者の熟練、労働者一人当り一時間の生産高にいちじるしい向上は見られなかった。しかもま
た、低開発国の輸出貿易は、ある程度にまで達してから後は、停滞気味となり、その多くは現在でも低迷状態を
続けている。

これを要するに、低開発国の貿易は、先進国の貿易に比べて、柔軟性、適応性に乏しいということができよ
うかと思う。これが低開発国の貿易の特徴であって、この一九世紀式の低開発国の貿易の成立を明らかにする理
論としては、スミスの貿易理論の方が比較生産費説よりも妥当性をもっている、というのが Myint の見解であ
って、彼はそこにスミス理論の意義をもとめている。